カラホト調査と私

弓場 紀知（京都橘大学・文学部）

カラホトは私にとって青春の思い出であり，あこがれの地である。27年前NHKの「シルクロード」が放映され，日本中がシルクロードにくぎずけになった。喜多郎のテーマミュージック，石坂浩二の独特のナレーション，砂漠を行くラクダの列と，鈴の音。我が師，故岡崎 敬先生（東西交渉史，当時九州大学文学部教授）はNHK 取材班とカラホト城を訪ね，城内で中国陶磁器，仏教遺物などを採集し，「絹だ，絹だ！」と思わず発した言葉は今だに語り草になっている。それから23年後，私がこの地を踏むことになるとは夢想だにしなかった。杉山正明さんから参加の誘いを受け，地球研のオアシスプロジェクトに加わることになった。その時の杉山さんのお言葉，「弓場さん，カケラをみたら時代，窯が分かるんでしょ。カラホトに行ってください」でした。正直にいえば地球研の存在すら知らなかった。旧春日小学校でのミーティング，さっぱりわからない自然科学のレクチャー。03年の9月，加藤雄三さんをチーフとし，井上充幸，荒川慎太郎，古松崇志，フォン・ファルケルハウゼン，承志の各氏とカラホト2週間の調査旅行。とにかく現地を見れることだけでもうれしい。岡崎先生からカラホトへの旅のきびしさを聞かされていたから，張掖の大仏寺でお札を買った。黒ゴビ砂漠のランドクルーザーはたしかにきびしかった。そして，カラカラの猛暑，体力にやや不安を感じていた私にとっては厳しいものがあった。しかし，ようやくたどりついたオアシス都市，エチナの雑踏と緑はほんとうにうれしかった。オアシスが実感できたのである。それまで中国調査は同じ陶磁史研究者との旅行が多かったが，東洋史の中に加わっての調査ははじめて。逆にこれがよかった。陶片を採集しながらカラホトの歴史の話を聞くことができるのである。皆さん，まことに博学，実に細かいことまでご存知。中国の奥地，カラホトで遺跡を踏査したり，カラホト城で陶片を採集したり，私にとってはこんな充実した時はかつてなかった。専門を異にするする研究者が，カラホト，というキーワードでさまざまなとりくみをしていた。その時はバラバラでも，最後はカタチになる。これこそ生きた学問なのである。違和感を感じていた自然科学の研究者の話も現地に立つと納得がいく。06年9月，現地で行われた国際シンポジウムで気象学，湖底生物学，地理学の研究発表は環境の復元に大いに参考になった。とりわけ，遠藤先生のグループが天鵞湖の復元をされた発表は印象的である。かつては天鵞湖が満々と水をたたえていたという発表は，現状からものを考える私たちにはショックでさえあった。陶片がなぜここにあるのか，なぜカラホト城が廃虚と化したのか，等々。シンポジウムの最後にオアシスプロジェクトのリーダー，中尾正義さんのお言葉も忘れがたい。「議論はかみあう必要はない。ぶつかりあうことで新しい道が開ける」。さすがに自然科学・人文科学をたばねる親分のお言葉である。民族学の研究者のエネルギッシュな行動力にも驚かされた。小さな，きゃしゃな小長谷さんにあんな行動力があるとは（失礼！）。エルミタージュ美術館でコズロフ採集の陶磁器が調査できたことも大いなる収穫である。コズロフ採集の陶片はよく知られていたが，陶磁研究者で実際に調査した人はかつていなかったのである。NHK 取材班との共同調査であったが，ようやくほんものにめぐりあえたのは幸いであった。しかし中国側の発見陶片は2回のチャレンジにもかかわらず，今だに実現しない。これからの宿題である。誘ってくださった杉山さん，人文学の研究者，オープンな地球研の研究所，ほんとうにありがとうございました。